

その後いかに経過していますか？プロジェクト



## 株式会社 M-easy



対応してくれた人の名前：戸田友介  
 調査員：真木宏哉、浜口美穂  
 レポート作成者：浜口美穂  
 取材日：2016年11月24日  
 取材場所：福蔵寺内 M-easy事務所

## 活動内容(「山村再生担い手づくり事例集」より)

## ●活動の経緯

戸田さんが名古屋大学の学生だった当時、大学、学生、経営者の有志が集まってこれからの社会のあり方について議論する「ひと循環型社会支援機構」に参加。これをきっかけに、「これから農業がどんどん衰退していき、自分たちの時代は、安心して食べられるものがなくなってしまうかもしれない！」と思い立ち、若者による農業をベースにした未来づくりをすることを掲げて、同機構の支援も受け、学生を中心に同社を設立した。

2006年から常滑で有機無農薬野菜の生産を開始。縁あって地域のおばちゃんたちの自家用野菜も一緒に名古屋市内を中心にひき売りを行うようになり、2008年に「やさい安心くらぶ」を立ち上げた。これらの事業は2013年10月末に同社から独立。

2009年9月～2011年3月末まで、豊田市旧旭町で「日本再発進！若者よ田舎をめざそうプロジェクト」(若者PJ)を豊田市、東京大学と連携して実施。10名の若者が旭地区に移り住み、安心安全な農業を中心に山里の暮らしを体験。さまざまな価値観の相違などの困難を経て、山里の豊かな自然環境、豊かな人間関係、豊かな暮らしなど「ここには価値あるものがあって、それを表現することが、自分たちの暮らしにつながる」ことに気づいた。

結果、7人が独立して移住。現在は、時につながりながら、福蔵寺の境内でご縁市を開いたり、米や大豆や餅や綿をみんなで作る「まるっこくらぶ～みんなで作ってみんなでわかる野良仕事～」などを実施している。また、都市の人・団体などを受け入れ、山里の体験を提供する講座も実施。2013年3月には「生きるを考える講座」を行った。

## 前回の取材後、どのような変化がありましたか？

## &lt;戸田さん自身&gt;

## ●毎年3割くらい変化していく

前回の取材(2013年11月)時にモットーは「生き方、暮らし方を問い続けながら、ライフステージに合わせた活動を行っている」ということだったが、その通り、毎年変化を続けながら、100を超える「暮らしのシゴト」に取り組んでいる。

## ●「暮らしのリズム」が刻めるように

2011年に移住して、3年で「暮らしのリズム」が刻めるようになってきた。時間のリズムに関しては、「充足感、幸福感、稼ぎなどが湧き上がる『重なり合い』を育むための予定を入れる」など、戸田流ポイントがいくつかある。

## &lt;働き方がテーマ&gt;

## ●薪づくりと薪の販売

事例集Ⅲで紹介されている「あさひ薪づくり研究会」の事務局長をしている戸田さん。「旭木の駅プロジェクト」から原木、あるいは玉切りにした材(2割多いモリ券を出す)を薪づくり研究会が仕入れて加工、M-easyが配達を担当する仕組みで回っている。長野県の薪ストーブ販売会社DLDとも提携し、薪ストーブユーザーへ配達。2017年には、薪づくり研究会の仕入れ・加工とM-easyの配達を合体させ、有限責任事業組合の形で法人化の予定。薪の配達はコミュニケーションの機会にもなり、米を作っているスタッフとお客さんの世間話から「じゃあ、お米も配達して」ということもあるとか。

また、旭地区の鉄工所と1ターンの若者が協働して、薪ストーブ民主化プロジェクトも始まっている。

## ●小渡・小原販売店「戸田新聞店」営業スタート

高齢化で続けられない旭地区・小原地区の新聞店の事業を引き継いで、2015年にスタート。中日、朝日、日経など読売新聞以外の新聞を配達している。また、新聞店のFacebookも開設し、地元の新聞記事や新聞折り込みチラシを掲載している。35人の配達スタッフがフレキシブルに働けるようシフトを組んでいる。チラシを折り込むのは女性3～4人がシフトを組んで担当。新聞配達と野良仕事を組み合わせるなど、各人が自分の時間を有効につかって働くことができるよう考えている。それは薪の配達も同じ。移住者の仕事にもなっている。毎月、「Staff Press」も発行。

### <ものづくりと仲間づくり>

#### ●電動軽トラ改造計画「暮らしっくCarをつくろう♪」主催

2014年から、軽トラを電気自動車に改造する講座を開催している。トヨタ自動車の技術者などがボランティアとして参加し、キットを用い、公道を走ることができる電気自動車づくりのノウハウを学んでいる。

#### ●山里合唱団「こだま」発足

2014年に発足。Iターンしたプロのソプラノ歌手が指導。月に2回、福蔵寺で練習をしている。練習の前には子どもたちも一緒にみんなで夕飯を食べておしゃべり。地域の文化祭や老人会、福蔵寺ご縁市などで披露している。

#### ●「やさしい暮らし委員会」設立

2016年に設立。「あさひごよみ」「あさひめぐり」の制作を行っている。「あさひごよみ」は、高齢者施設の利用者の貼り絵作品を中央に大きく使用。高齢者施設の利用者と地域とのつながりが切れないうちの配慮がある。毎月、新聞に折り込んでいる。「あさひめぐり」は、365人以上の多様な人たちが関わって、めくるたびに旭を感じられる日めぐりとして、2017年版から発行を始める。

#### ●常に変化する福蔵寺のご縁市

6年目。年3回開催し、毎回400人ほどが集まる。車が渋滞するので、最近は1週間前にしか宣伝しない。人が加わることで常に変化している。やりたい人がやりたいようにするのがポイント。

### 地域の変化

#### ●若い移住者がうなぎのぼり

この5年で毎年10世帯前後の移住者がある。こども園では定員を超える希望があり、対応を検討している。

#### ●移住文化を築いてきた

「あさひ若者会」(事例集Ⅱに掲載)発行の「シトルカン」で移住者に地域の魅力も語れるように。子育て世代の移住者が増え、「移住者が地域の担い手になる」という文化が根付いてきた。移住者同士のネットワーク、地元側のネットワークも広がっていて、必要なときにつながっていける状態に。

### これからやろうとしていること

#### ●参加型ものづくりによるいなかの人材結集拠点づくり

持続可能な暮らしを求める若者、担い手不足に直面する地域住民、企業でものづくり技能を培ってきた中高年など、様々な人がものづくりをしながら交流できる拠点をつくりたいと考えている。子どもも巻き込み、子どもたちに大人が生き生きと働く姿を見せる教育の場にもなるようにしたい。

### 山村再生担い手づくり事例集の活用に関するアイデアがありましたら教えてください

この情報をウェブやFacebookなどでもっと外に発信できないか。地図上にプロットしたり、地域別、テーマ別にインデックスをつけたりして、見る人が必要な情報にたどり着きやすいように。

写真



父の働く姿を見てのびのび育つ宗介くん



あさひごよみ



Staff Press